

Capitalism and Environmental Problems

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 成 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/561

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



資本主義と環境問題

Capitalism and Environmental Problems

内 田 成

UCHIDA, Minoru

1. はじめに

かつてエリック・ロールはヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929) の影響力が非常に強力で広範囲に、そして時として思いもしない分野にまでおよんでいる、と述べた⁽¹⁾。またマックス・ラーナーの言葉を借りれば、ヴェブレンは社会科学の諸分野間の垣根を取り払った、いわばホリスティックなアプローチに特徴がある⁽²⁾、といえる。それまで経済学固有の問題として捉えられていたものも、ヴェブレンはより大きな文化的な現象の一部として考えた。ヴェブレンにとって経済学は文化科学であった⁽³⁾。

ところで、本稿で取り上げるミッチェル (Ross Mitchell) の論文「環境社会学の先駆者ソースタイン・ヴェブレン」⁽⁴⁾は、資本主義および環境に関するアメリカ制度派経済学者ヴェブレンの著作を祖上にあげ、(a)資本主義の一つの帰結としての自然資源の利用に関するヴェブレンの立場および(b)環境社会学に対する現在におけるその適切さに二つの点に基本的な視座をおいている。具体的には衛示的消費 (conspicuous consumption) の理論、不在所有者制および自然資源の搾取などを採りあげ、吟味している。ミッチェルは

自然資源の浪費的使用および見栄的消費 (emulative consumption) についてのヴェブレンの先駆的分析が環境社会学にとってきわめて重要であり、環境危機の現在において時宜を得たものである、考えることができよう。

2. 環境社会学とヴェブレン：基本的分析視角

ミッチェルによれば、19世紀のアメリカでノルウェー人の自作農場で育ったがアメリカの辺境の土地は制度派経済学者であるヴェブレンにとって大きな足がかりとなった。そこにおける開拓的なバックグラウンドは、そのすべてに大きな影響を与えた。ヴェブレンは資本主義理論および制度主義者の理論における処女地を開拓したが、彼は批評家と礼賛者によって誤解され、間違っ て解釈され続けた。ヴェブレンは古典的な『有閑階級の理論：制度についての経済的研究』⁽⁵⁾で有名になった。その主要な方法論は近代の経済生活の研究にダーウィン主義的な進化の観念を応用した。資本主義および社会についての先見性のある分析は、マルクス、デュルケムおよびウェーバーたちと並べて位置づけることができる。ヴェブレンはマルクスの著作から非常に多くの影響を被っているけれども、決してマルク

キーワード：環境、資本主義、制度、ヴェブレン、汚染
Key words : environment capitalism institution Veblen pollution

ス主義者ではない⁽⁶⁾。しかしながら20世紀の転換期におけるアメリカのビッグ・ビジネスについてのヴェブレンの批判は過小評価され、その結局として、多くの人々は、いかにヴェブレンが環境や社会を洞察鋭く位置づけていたか、という点を認識し損ねてきた。

ヴェブレンは、あらゆる近代の物質主義が、時間と富の眼に見える見せびらかしという非生産的消費によって浪費すること、すなわち、「無駄な努力という偉大な経済的法則」と呼んだものに無理やり変えられたか、ということを主張している。その結果、ヴェブレンが資源の稀少性の問題を社会的ニーズ、産業的欠陥および企業の操作と結びつけている、と主張するものもある。さらにその研究の社会環境的側面は合衆国における急進的および制度主義者の経済的伝統の中で理解され、発展してきた。しかし、現在までのところ、環境社会学という領域に対するヴェブレンの適切さを探求する、といういかなる包括的な試みもなされていない⁽⁷⁾。

そこでミッチェルは「ヴェブレンの著作がグローバルな環境危機を引き起こし、悪化させている人間性の役割に貴重な考察を提示している。私の意図はヴェブレンをこれらの方向に沿って位置づけることで、環境および社会に関連した批判的な中核についての理解を改善するために古典的な視点を得ること」である、と述べている⁽⁸⁾。

まず、第一に環境は環境における生物的要素と非生物的要素の統合を象徴しているばかりでなく、人間性のあらゆる物的サポートの場所でもある。環境は物的世界と、森林、土地、空気および水のような天然資源を含んでいるばかりでなく、人間の介在や影響も同様に含んでいる。結局、環境危機は不可避であ

る。というのも、エネルギーと原材料の汚染と消費と原材料はコントロールし、抑制することができるが、完全に避けることはできないからである。

次に環境社会学は因襲的な社会学の批判と考えられており、1960年代後半の環境運動から生じたひとつの個別な領域であり、1970年代に主流派の社会学雑誌に現れはじめた。大多数の環境社会学者は環境的ジレンマに取り組む社会の能力に批判的なままであるけれども、そのような問題に対する択一的な解決法を採す際に資本主義的経済あるいは民主主義的政治システムを拒絶してはいない。さらに厄介なことに古典的な社会学の伝統が環境問題への体系的な考察を欠いている、という主張もある。この見解とは反対に最近の研究は、古典的な基礎を現代の環境社会学に適用することによって、いかに多くのものをわれわれが学ぶことができるか、を示している。

マルクスが広範囲に及ぶ人気を得たのに対してヴェブレンはその理論的貢献にもかかわらず正しく評価されてきていないが、多くの学者への影響力はあきらかである⁽⁹⁾。しかし環境社会学や自然資源社会学の理論や実践に関する最近の研究において、衛示的消費や天然資源の浪費的抽出プロセスに関する批判的な理論家として、ヴェブレンはほとんど引用されてきていない。この領域に関する研究において、多くのものはデュルケム、マルクスおよびウェーバーを環境および社会に対する潜在的な貢献者と看做しているけれども、ヴェブレンは軽視されているか、あるいは全く無視されている。

資本主義の浪費的で天然資源を荒らす慣行と対峙しているヴェブレンの批判的な思想は、『有閑階級の理論』や『営利企業の理論』といっ

た著作で明らかである。けれども最後の著作『近代における不在所有者制と営利企業：アメリカの場合』は見落されてきた。ヴェブレンは天然資源の搾取的利用に関して『不在所有者制』においてはアメリカの経済システムの問題点について批判的に述べている⁽¹⁰⁾、とミッチェルはいう。

3. 社会および環境についてのヴェブレンの思想

次にミッチェルは、いかにヴェブレンが資本主義を環境問題と関連づけたか、という問題について説明を加えている。それによるとヴェブレンの環境の利己的利用と資本主義との間の関連についての理論を説明は3つの部分から構成されている。すなわち(a)略奪階級と産業的階級との区別、(b)衒示的消費、衒示的閑暇および衒示的浪費に関する社会心理学的概念および(c)不在所有者制である⁽¹¹⁾。

環境悪化および公害の根本的原因である企業による無謀な浪費に関するヴェブレンの消費者志向社会の考え方は急速な環境的および社会経済的変化を被っている今日のグローバルな文脈において有効性をもっている、といえる。

3-1 労働の略奪

ヴェブレンは社会の発展を二つ階級に区分した。それは産業的階級あるいは労働者階級と略奪的階級（金銭的階級あるいは企業家階級）の間の根本的な区別である。産業的階級は生産的労働に従事している人々から構成されており、近代社会の実質的な富、役に立つ財を生産する。それに対して略奪的階級は、社会のその他の人々のイノベーションや生産性に頼って生活する「寄生的な」ビジネスメ

ンバーから構成されている。ヴェブレンによれば、そのような人々が社会の福祉のためになるいかなるものも生産しない代わりに自分自身の富を極大化し、先進的工業社会の協調的運営を妨げるために競争的な操作に依存する。社会の大部分の人々は産業的階級であるが、掠奪的階級は少数者からなる特権階級を形成している⁽¹²⁾。

ヴェブレンは企業家階級が19世紀に掠奪的行動に従事し始めた、と考えた。人間および非人間的要因の利用は「産業的効率」という美名のもとに主要なものとなった。ヴェブレンにとって、掠奪的行動はテクノロジーが生活維持に必要であるものを超える余剰を創造するのに十分に進歩した後にのみ可能である。さらにヴェブレンは、集团的福祉にとって「製作本能」が最も重要な意味を持っている、と主張する。しかし、それは金銭的な利害の台頭によって妨げられる⁽¹³⁾。

さらにヴェブレンにとって、産業は役に立つ富の生産、そして企業は利潤の蓄積と看做された。いかなる場合でも、動機は本質的に同一である。すなわち、市場支配と暴利をむさぼることであり、それは社会的な損失をもたらす、と考えられた。企業と産業の対立が経済的崩壊を生む、と信じていた。

3-2 消費と浪費

『有閑階級の理論』においてヴェブレンは、人々の行動の大部分、特に消費および閑暇のパターンが、高い地位に対する個人の懸命な努力によって説明しうる、と考えた。衒示的消費によって、ヴェブレンは富の浪費的消費は上流の、略奪的階級を象徴する高い社会的地位のシンボルと考えた。彼は何らかの種類

することなしに、時間を費やす人々のものとして街示的閑暇を定義した。ヴェブレンは街示的浪費を街示的消費および街示的閑暇の結合体と看做し、それらが同一の社会現象の二つの形態である、と仮定した⁽¹⁴⁾。

ヴェブレンは、財が社会によって二つの方法で用いられている、と考えた。すなわち、街示的消費を充足し、何らかの目的を達成する。彼の支出の判断基準は、それが人間生活を直接的に増進するのに役立つかどうかである。さらに消費と閑暇は、より低い社会的地位にある人々に、富の明白な標示を見せびらかす人々と競争することで、その社会的地位を高めるようにさせる。街示的消費という特徴のために、スタイルやファッションは機能との関連を見失う⁽¹⁵⁾。嫉みや見栄は消費を動機づけるし、その継続は上層の略奪的階級の支配を維持させる。にもかかわらず、かかる行動は、共同体の総てのメンバーが共有する物的生活手段を供給しうる有益で平等な経済成長に関するほとんど全体的な不適切さを示している。

また、ヴェブレンは資本主義の現代的側面のシンボルとしての広告やマーケティングについて述べた初期の人物のひとりであった。新たらしい販売テクニックの発展の最終的な結果は、消費と浪費を強力に促進するものであった。大衆を誘惑するために新聞広告によって作り出される浪費の大きさは無視できない。ヴェブレンはこう述べている。

「したがって、製紙工場を通過する木材パルプのほぼ半分ぐらいは、製紙産業と印刷取引にかかわる人的資源と機械設備の半分は競争的販売のために消費されており、その純然たる効果は消費者によって財のために支払われる価格を上昇させている、といってもほと

んど過言ではない」⁽¹⁶⁾。

マーケティングと広告は制度的なメカニズムである。その文化的なメカニズムにおいて見栄(emulation)が決定的な重要性をもっている。見栄は社会研究についてのヴェブレンの理解にとって中核的である。中産階級および労働者階級は上層階級の名誉ある浪費および消費者スタイルと対抗する。だから浪費と消費は有閑階級から広がり、資本主義という文化全体の決定的な特徴となる。

浪費によって、少なくとも『有閑階級の理論』の文脈においては、ヴェブレンは産業やその他の人間の活動から生ずる公害や廃棄物(すなわち、近代経済学の「外部性」)については言及していない。むしろ彼は経済的非効率性や社会慣習的競争パターンに言及している。それは(a)公害は19世紀においてシカゴのような工業の中心地では主要な問題であったけれども、20世紀の後半に典型となる広範囲なダメージほど大きくなかった。また(b)非物質的なステータスシンボルとしての街示的浪費、街示的閑暇および街示的消費や企業および国家の浪費によって引き起こされる資源不足についてのヴェブレンの批判的議論は生態学的にダメージを与える資本主義の批判に対する重要な貢献をなしている。天然資源の浪費はヴェブレンにとって主要な関心事であった。

3-4 天然資源の利己的な利用

ヴェブレンが天然資源の利己の利用についてかなり精通していることは、最後の著作『不在所有者制』に恐らく最もはっきりと示されているが、環境社会学者には事実上、黙殺されている。そこで提示されている議論は、不在所有者による土地の買収、浪費的な天然資

源の抽出、および生産的な土地の基盤の急速な悪化などである。詳細に論じられている天然資源の利用の例は、毛皮の取引、金の採掘、石炭産業や鉄鋼業、樹木の伐採、水力発電や粗雑な石油調査と生産などである。この著作を通してヴェブレンは材木商、石油生産者およびその他の「産業の将帥」を厳しく批判している。ヴェブレンは「不在所有者制がアメリカ文明の支配的な制度」⁽¹⁷⁾になってきた、と考えた。そのような不在所有者制は既得利権である。それらの人々は天然資源、物質資源および人的資源を金融的利得のために利用している。しかし、ここで注意しなければならないことは、ヴェブレンも述べているように、総ての天然資源の所有権が不在所有者とは限らず、所有者の製作本能に根ざしていないわけでない。小規模の農場主は大概、不在所有者ではない⁽¹⁸⁾。

ヴェブレンは「略奪的」ビジネスが環境コストの共有しないためでなく、根本的理由のために非難している。すなわち、投機家や暴利をむさぼる商人のように利己心で動くひとびとはヴェブレンを特に激怒させた。利己心は商業的農業運営を動機づけ続けた。

3-5 フロンティアの終焉

ヴェブレンが述べているようにフロンティアの拡張は、本質的に特定の天然資源の金銭的目的のための強奪である。彼は国家の豊富な天然および公的資源はアメリカンランで定められた「堅固なビジネス」という楽天的な原理で意図的に使い果たされてきた、と激怒している。

「不在所有者制」はアメリカ固有のものではないが、その他の国よりも一層首尾一貫し、より広く行なわれている、という意味で例外

的である。さらにアメリカの生活および文化という文脈でより忠実に行なわれている。このアメリカンランあるいは政策は、合法的な強奪という形において、あらゆる公的な富を私的な利得に変える非常に単純な固定化された慣行である⁽¹⁹⁾。

ヴェブレンが述べているように、この計画の影響をうけた天然資源は毛皮が商品価値をもっている動物であった。毛皮貿易は、今や先駆的なビジネスのほとんど記憶されていないエピソードであるが典型的な綿密さと迅速さをともなう起業家によって破壊された、と感じた⁽²⁰⁾。そして、かつては豊富であった「共同財」は、社会的あるいは生態学的帰結の確保を留意することなしに浪費されてしまった。毛皮貿易のための野生動物の「略奪行為」は、ついで金やその他の貴重な鉱物の獲得となり、木材、鉄、その他の鉱石、石油、天然ガス、水力および灌漑権などの押収をともなった。

3-6 森林開拓

第7章の5節「森林地と油田」の中でヴェブレンは、木材産業の歴史的発展を概説し、「いかに不在所有者制がこの国の天然資源を継続的に使用するのに機能し、それらを使いきってしまったか」を説明している⁽²⁰⁾。ヴェブレンは「進取的な」木材業者による純利得の急速な追求によるアメリカ東部および中西部の破壊を批判している。平原の常緑の東部の大部分、たとえば、松、米樺、モミおよび杉などは19世紀の後半を通じて浪費され、実質的に使い果たされた。ヴェブレンは、いかに不在所有者制が材木の生産のために天然資源を継続的に使用し、それらを使い尽くす際に機能したのかを例証しているし、森林地を無尽蔵と看做す近視眼が木材資源の破壊を導

いたかを説明している。何よりもヴェブレンは、全体として社会の犠牲によって行なわれるいかがわしい慣行に使われる樹木の非経済的利用を公然と非難した⁽²¹⁾。ヴェブレンは、不在所有者によって伐採された後に残ったものは大きな犠牲を払ったコスト社会であった。それは「最初から計画的な経済および保護の計画」で管理すべきであった、と述べている⁽²²⁾。

3-7 その他の天然資源

ヴェブレンによれば、その他の天然資源から生じるものも森林地の場合と本質的に異なっていない、という。すなわち、最初は浪費、そして最終的には大規模な不在所有者制と準独占的立場というアメリカンプランの典型的な特質を示している⁽²³⁾。彼は、石炭、鉄および水力がすでにかなり固定された無条件な不在所有者制を基礎とする企業統制のもとにおける談合による管理状態に到達した、ということを示している。そして、原油の抽出は初期の木材企業に類似しており、どんなにコストがかかっても役に立つ資源を急速に取り出すことにする集中する、という特徴もっている。多くの点で資本主義的目的のための天然資源の利用についてのヴェブレンの風刺的描写は剰余価値のための土地および原材料を搾取する産業ブルジョアジーについてのマルクス主義者の観念に近い。さらに彼はアメリカの農場主の立場を「その背景にある既得利権」によって操作されていると述べている。農場主に対するヴェブレンの主要な批判は、しばしば金銭的利害を満足させる浪費的な農業慣行に向けられた⁽²⁴⁾。

ヴェブレンにとって大規模の農業の所有者は不在所有者でもあった。自分自身の農場に投資することで、彼らは、その所得稼ぐ能力

において既得利権である、とされている。ヴェブレンは、農場主は負の経済的、社会的および環境的影響とともに、彼らが与えられ、維持できるよりも多くの土地を獲得する傾向がある、と述べている。チームワーク、製作の気質および共同体精神という伝統的な価値は金銭的利害で置き換えられる。近代の農業の方法は、いかなる個人経営者も彼独自の個人的労働の使用だけでは営めない規模で経営される、という点に特徴がある⁽²⁵⁾。

3-8 テクノロジーと自然

一見して、天然資源およびテクノロジーに関するヴェブレンの見解は、浪費および搾取に関する先行する分析といくつかの著しい矛盾を含んでいるように思われる。特にヴェブレンは、天然資源は社会的に作られたものとして価値がある、と感じていた。というのも、社会はその利用に対して喜んで支払うからである。たとえばヴェブレンは天然資源、たとえば、木材、石炭、石油および鉱石などを技術的知識の改良の結果として絶えず増大しつつあるものとして述べている。彼は、テクノロジーの急速な進化が新しい道具、デザインをもたらし、製材所におけるより効率的な切断方法のような天然資源のよりよい利用をするように処理する、ということに気づいた。テクノロジーの進化を賞賛しヴェブレンは、天然資源が単にその土地の特徴ではない、と主張した。というのも、技術者は、天然資源をどうやって活用するかを知っているからである⁽²⁶⁾。

天然資源の乱用はテクノロジー自体問題ではなく、産業の誤ったマネジメントである、とヴェブレンは考えた。企業の所有者はこの安全で分別のあるビジネス慣行が産業体制の

その他の部分に与えるいかなる混乱、浪費あるいは失業のあらゆる責任も放棄している。本質的に強欲な暴利をむさぼる商人は、進行中のテクノロジー、消耗性の生産的労働および天然資源の健全な適応を歪める。

ヴェブレンは産業プロセスについて卓越した知識をもっている技術者や専門家が本質的に生産のビジネスにより熟達している、と信じていた。彼は、ビジネスマン、会計士および金銭の管理者が技術者や財を生産するその他の熟達した人々を追放する、と嘆いた。ヴェブレンは、もしも土地が強欲なLand Baronによって無分別に利用されつづけるのならば、天然資源はいかなる持続しうる方法で管理ができない、と述べている。

アメリカの天然資源は豊かさおよび有用性において並ぶものがない。そしてそれらは常に住民の生活と快適さが依存している主要な要因であった。この物的幸運という点において存在しているものは、直接的にも間接的にも、これらの天然資源の不在所有者制である⁽²⁷⁾。

社会にとって有用な何らかの生産的目的に役立つものとしての天然資源に関するヴェブレンの見解は、疑いもなく、現代の資源依存社会によっても十分に理解されよう。さらにまた、ヴェブレンは天然資源の理不尽な破壊と関連した諸問題を予知していた。それは結局、欠乏を導き、もしも適切な方策が採られなければ除去し得ないものである。

4. 資本主義および環境に関するヴェブレンの影響

資本主義、富および財産の起源についてのヴェブレンの歴史的な取扱いは、労働や貯蓄に対する報酬であるばかりでなく、労働や土

地に略奪や利己的利用にも関連している。ヴェブレンは、これが略奪的なビジネス日和見主義者や暴利商人のためだけでなく、浪費的消費主義に関与するノースの「有閑」の傾向や中産階級のためでもある、と主張している。ヴェブレンは、労働者階級も中産階級の浪費的習慣や象徴的装飾と見栄を張ろうとする、ということを知した。

ヴェブレンの最も重要な影響は環境社会学よりもむしろ環境経済学にある。たとえば、ハロルド・イニスは、北アメリカの天然資源—すなわち、毛皮取引、タラ漁およびパルプや製紙産業などの基幹産業を研究したが、そこにはヴェブレンの影響がある、といえる。またヴェブレンの理論は、合衆国の連邦管理のニューディール政策の多角的利用の土地管理に影響を与えた。教え子の一人である、クラウド・フランクリン・クレイトンは土地経済学の研究の創生期から第二次世界大戦までの間、合衆国の農業局における主導的な人物であった。彼は1930年代の合衆国再植民化管理局の耕地に値しない土地の利用計画の計画化および監督に貢献した。クレイトンによって着手されたメリーランドのプロジェクトは効率を改善し、浪費を減少させるためであったが、そこにヴェブレンの多角的利用の概念を利用している、というものもある⁽²⁸⁾。

産業主義、近代化および消費主義者行動に関するその他の著者もヴェブレンに負っている。ミッチェルによれば、疑いもなく、生態学の歴史家であるクリストファー・ヴァーシーや先駆的な社会生態学者であるジェイムズ・ローティにも非常に大きな影響を与えている。たとえば、ローティは、特に資本主義的浪費や非効率性に関しては、その分析の大部分がヴェブレン主義の原理に基づいている⁽²⁹⁾、

とミッチェルは述べている。また、環境社会学者であるマイケル・ベルのようにヴェブレンの著作にエコロジカルな含意を見ているものもある。さらにアラン・シュナイベルクとケネス・ゴウルドはヴェブレンが非常に限られた範囲であるけれども環境社会学の領域の中にある、と考えている。例えばゴウルドなどは、エンジニアに対する会計専門家による生産の意思決定についての支配の増大が近代産業の質的な変化を象徴している、というヴェブレンの主張を強調している⁽²⁹⁾。

またヴェブレンは非常に資本主義に批判的な少なくとも二つの重要な急進的な経済的な著作において、広く信頼を与えられている。バランとスィージーの『独占資本』とカップの『企業の社会的費用』である。カップの分析は福祉経済学の影響を受けているけれども、資源の競争的利用、計画的陳腐化および破壊的な近代のテクノロジーと結びついている社会的費用についての制度的研究において徹底的にヴェブレン主義的である。カップは次のように述べている。

ヴェブレンが「サボタージュ」および産業や生産量（「生産の意識的撤収」の遅れおよび妨害にかんして、浪費や産業における複製、輸送および流通に関して、販売術（およびパブリシティ）の累積的成長および人間の信頼性や恐怖や恥という感覚に演じている役割である。あるいは金銭的浪費、個人的な無益さおよび価格体制およびその商業的真實の標準による文明の遅滞や抑圧に関していったもの、これらは常に「社会的費用」として定義される重要な示唆を残している⁽³⁰⁾。

明らかに、資本主義の社会的および環境的インパクトについてのヴェブレンの先見の考え方は環境社会学以外の領域では探求され

てきている。発展しつつある諸国がアメリカの文化を模倣しはじめるにつれて、ヴェブレンの著作に飽くことを知らない欲求が限りある天然資源にもたらす容易ならぬ事態についての初期の理解を見たものもある。また、その他の人々はヴェブレンが企業利害のみによって導かれる工業文明の非合理的浪費さによって反対した初期の環境主義者の立場にある、と考えた。ヴェブレン主義の経済学者は、アメリカの自由な経済成長時代における企業、浪費および天然資源の利用を批判しているし、さらに、社会および環境に関していうべき多くのものを持っているとアピールしている⁽³¹⁾。

5. メイソンの結論

以上のように述べてきたミッチェルの結論は、ヴェブレンの先駆的な洞察が十分に環境社会学という領域に取り込まれていない、ということである。しかし、経済学、政治学および文化的な制度の環境的含意が環境社会学の研究において優位を占めるならば、ヴェブレンの制度的な論理を再検討し、適応させることが十分にできるであろう、といえる。

つまりヴェブレン自身が関心をもった資本主義、生産および消費双方の浪費および不在所有者制という3つの主要な分野は環境社会学の研究にとって非常に有用なものである、といえる。その分析の主眼点は、略奪的金銭的目的に専心する資本主義システムと原材料を消費財に変形するために必要とされるエンジニアリングあるいはテクノロジー、すなわち使用価値の生産との間の矛盾にある。何らかの社会的費用あるいは環境的費用で利潤を獲得することは、その後の彼の仕事の大部分を貫く指導原理である。ヴェブレンが繰り返した述べたように、企業利害は資源を利己的目

的のために使用し、浪費することを運命づけられている。環境およびその資源の分別のある、道理にかなった、効率的な使用は外因的なものとして退けられている。「タダで何かを手に入れる」という信念に基づくいかなる社会経済的システムや政治システムも既得利権を満足させる以外のいかなる選択肢ももっておらず、資源や環境の劣化の有用性を減ずるというコストを払うことで、人間性の残りの部分を捨ててきた⁽³²⁾。

グローバル時代において天然資源の絶え間のない浪費と容赦のない消費は、多くの社会学者や経済学者が現代の問題として取り扱ってきた環境問題である。それらは20世紀の間に、大部分が確実に危機的水準あるいは危機的水準に近くまで増大してきたけれども、これらのものは社会にとって新しい問題ではない。『有閑階級の理論』の核心部においてヴェブレンは、社会が本質的に浪費的である、と考えていた。しかしながら『有閑階級の理論』は、しばしば過度な消費をする富者の些細な欠点や愚行に関して誤解されている。ヴェブレンは衛示的消費が一種の社会的奇行あるいは非合理的な消費である、あるいはわれわれは常に行為およびその帰結の有用性を考慮すべき、といっているわけではない。それとは反対に、ヴェブレンは、いかなる種類の消費行動の快樂主義的説明をも拒絶している。彼の消費論は個人的観点とは対象的な文化的観点に基づくものであった。総ての行動は文化的条件づけられ、由来している。資本主義の主要な帰結の一つに名誉ある消費および浪費への努力という変態がある。それ自体が目的である消費は、すべて浪費を伴い、本主義のもとで、すべての文化の決定的な特徴となる。彼の見解では資本主義の支配的な問題の一つ

に、産業が次第に特化してゆくにつれて、業務は、その機能について殆ど知識がないか、あるいは理解していない企業の管理者の手にゆだねられるようになる。生産技術やプロセスを改善することよりも、より多くの財を生産し販売することによる利潤を増大させるために、ヴェブレンは企業家が市場投機などの企業慣行や操作にたよる、と考えた。ヴェブレンは浪費に関心をもっていたけれども、それを引き出したのは現代資本主義の文化的帰結と含意であった、と看做したのである⁽³³⁾。

不在所有者制はヴェブレンが産業的成長の拡大時代の間批判したもう一つの先駆的な概念である。彼は浪費的な産業的ならびに一般市民の慣行が、特に不在所有者制のもとでは、企業のリーダーシップの方向性が変化するにつれて常態化するということを予見した。ヴェブレンは金融的目的の達成を助ける共謀が企業会社と政府の間の不可分の関係の中に存在している、と捉えた。ヴェブレンは重要な社会的変化の次元として企業のリーダーシップを理解した。ヴェブレンは狭隘で、利潤志向で、官僚的外見をもった経営者を非難し、本質的に効率的そして維持しうるような生産慣行についての乏しい理解が大部分の経営者や所有者が資源の理不尽な開発を導く、と主張した。彼は不在所有企業の加工効率の増大が原材料の前例のない量の抽出の原因である、ということを見越していた。かくして、その分析は生活のために天然資源に依存している人々、外的な独占の支配によって影響を受ける人々にとって特に関係があった。

さらにヴェブレンは階級に基づく現象としての産業とそれに固有な浪費の間を関連づけた人間の一人であった。環境社会学に関する古典的な視点をわれわれに与えることによっ

てヴェブレンはマルクスと類似した重要性を与えている。ヴェブレンは社会にとって役立つものを与えているところではない。ヴェブレンの著作は環境および天然資源の社会学にとって本質的な貢献を象徴している。ここでミッチェルは、二つの点を指摘している⁽³⁴⁾。

第一に、大部分の環境社会学者はヴェブレンの著作を真剣に、包括的な考え方を捉えていない。ヴェブレンは、イニスやカップのような著名な学者を含む主としてエコロジカル経済学あるいは政治経済学の中に位置づけられているが、その貢献は環境社会学を推進してきてはいない。

第二に、ヴェブレンの著作の環境社会学的側面に対する言及は簡潔であり、体系的ではない。彼の消費社会の批判は小さなセグメント、すなわち有閑階級あるいは略奪的階級に影響を与える、と誤解されてきた。なぜ資本主義の生態学的に破壊的で浪費的側面についての破滅的な批判であるヴェブレンの最後の著作『不在所有者制』およびその他の今日的な意義のある著作が環境社会学の領域の中で相応の重要性のある討議がなされないのか。

ヴェブレン、社会および環境の利己的利用についてスポットライトを当てることの意味はどこにあるのか？ミッチェルは、環境社会学はテクノロジー、環境およびより広い社会的諸力の結合した効果に対するより体系的な関心の形態からベネフィットを得ることができる、と信じている。もっとも重要なことは、ヴェブレンが急速に拡大しつつある諸国の間の生産－消費とマスマーケティングと利潤に対する流行しているコンシューマリズムに依存している略奪的なビジネスの関連を結びつけた点である。さらにミッチェルは、特に先行的な分析、環境および天然資源にもとづい

て基礎をおいているので、社会学は次の二つの領域で、ヴェブレンの理論的基礎から非常に大きな利益を得ることができる、といえるとともに次の二点を指摘している⁽³⁵⁾。

①生産およびコンシューマリズムについてのヴェブレンの思想の関連。資本主義－環境モデルはヴェブレン主義の視点によってすぐれた情報を提供されている。その多くの役に立つ処方箋、たとえば、企業的意思決定に技術的なインプットを組み入れる、効率的な抽出および生産プロセスの実行、製作価値の再強化および責任能力を持つ消費者習慣の促進といったようなものは、すべて環境と社会の相互関係にとって妥当性をもっている。政治的および経済的リーダーが人間のために何らかの意味の責任を行使すべきであり、絶えず拡張する消費や浪費を止めさせるための社会的な整理に対するその要求は責任のある、良識のある公共政策の形成のための何らかの実行可能なガイドラインを与えることができる、というのがヴェブレンの主張である。

②古典的な視点からの環境社会学の吟味。生産および消費トレンドの増大と関連している環境についての危機の理解の高まりはマルクス、ウェーバー、ヴェブレンやその他の社会批判家などの著作を比較することで得ることができる。マルクスはエコロジカルな視点から本質的に分析をしているけれども、ヴェブレンの工業資本主義論におけるジェンダー、階級およびコンシューマリズムについての詳細な区別は、大部分が認識されそこなっているか、単に無視されている。マイケル・ヒューグレーとアーサー・ビデッチによれば、ヴェブレンの近代資本主義の理解はマルクスとウェーバーを凌い

でいる、という⁽³⁶⁾。

ウェーバーは、ヴェブレンが無責任なエコロジカル浪費、人間のニーズ（人間の有用性）に関連した資源の管理の無視およびローン・クレジットの周期的な過度の拡張などを含む「ばかばかしい制度」や価格体制金銭的計算に見出した体系的な不規則性が理解されていないという。

検討すべき問題は浪費、消費および環境危機の政治経済学のヴェブレン独自の解釈との関連で探求する価値がある。つまりヴェブレンの視点からグローバルな経済活動の社会環境的インパクトのより深く理解を助長する、ということが期待される。彼の3つの著作、『有閑階級の理論』、『営利企業の理論』および『不在所有者制』は環境社会学および政治エコロジーといった分野の中で再考されるべきである。ヴェブレンが20世紀の転換期に見た妬みと見栄に負う消費の不合理性はグローバル経済の中で揺るぎないものになってきている。口先のうまいマーケティングと株主の要求による権力あるいは詐取によって扇動されるコンシューマリズムの広がり、世界的な企業統制を導く。ヴェブレンの時代よりも非常に大きな程度において今日、生産効率と政策は金儲けと計画的陳腐化の具体化の犠牲となる。ヴェブレンが予言したように、閑暇自体が次第に消費財になる⁽³⁷⁾。

6. ミッチェルの所説の検討

以上がミッチェルの所説の概要である。みられるようにミッチェルはヴェブレンの3つの著作、『有閑階級の理論』、『営利企業の理論』および『不在所有者制』を中心に、彼の資本主義という制度を分析している方法論が現代の環境問題を分析するために有効な分析ツ

ルである、ということの詳細に分析し、論証している。特に『不在所有者制』を中心に分析している。ヴェブレンは『有閑階級の理論』においては制度として「消費」を採り上げ分析しているが、『営利企業の理論』および『不在所有者制』においては、支配的な制度における支配的な制度としての「企業」(営利企業)を分析対象としているが、それらを貫く基本的な分析視角は同一である。

ヴェブレンにとって、近代の経済体制は二つのタイプの価値、すなわち経済的価値と金銭的価値を作り出す組織体である、と考えられた。この区分は産業と企業間の基本的な二分法に一致する。産業は経済的価値に関連し、企業は金銭的価値に関連する。経済体制の進化のある時期においては経済的価値と金銭的価値とは緊密な一致があった。つまり調和的であった。そのような状況の下では、金銭的な価値は経済的価値を反映していた、あるいは大まかな尺度であった。しかし、経済体制の発展の別の時には、これら二つの価値のタイプの流れは相互に離れていった。だから二つの価値のタイプの間の不一致が現われてきた。このような状況の下では、金銭的な価値は、もはや経済的価値の適切な尺度ではない。金銭的価値と経済的価値との間の一致のこの欠如から根本的な経済問題が生じてくる。

ヴェブレンは、人間文化の経済的なセグメントの中に二分法を見出した。これは産業的職業と金銭的職業の間の対立である。機械的な工業技術の論理を伴う産業的職業は、経済的価値の生産に関連している。それに対して価格体制の企業の論理を伴う金銭的な職業は、金銭的な価値を取扱う。ヴェブレンの関心をもった二分法は対立の源泉である。個人の中

には生涯を通じて心理学的対立および生物学的対立の双方が一貫して存在する。同様に社会のなかではさまざまなタイプの制度的配列の間に終わることのない文化的な対立がある。というのも、それらは人類の不変の性質の中に見出される二分法に根ざしているからである。ヴェブレンの基本的な方法論はさまざまな二分法から生じてくる。

ヴェブレンは近代の経済体制が二つのタイプの価値、すなわち経済的価値と金銭的な価値を作り出す組織体である、と考えていた。資本主義体制は人間の本質の中に存在する心理学的な対立に文化的な表現を与えているに過ぎない、と看做された。この心理学的な対立とは親性本能、好奇本能および製作本能と利己の本能あるいは取得本能との間にある対立である。

ミッチェルも指摘しているように『有閑階級の理論』においてヴェブレンは人間の浪費的な活動については言及しているが、そのような活動から生ずる郊外や廃棄物については論及していない。しかし『不在者所有制』において天然資源の利己の利用について、上に述べた資本主義固有の金銭的価値の追求という視点から分析している。つまり資本主義がその金銭的な価値、すなわち反社会的な利己的なものを追求し続ければ、それは必然的に資源の枯渇、環境破壊を導く、という点を指摘している。この制度に特有な浪費的性格は消費だけでなく、土地や天然資源の利己的な利用も行なう。したがって、このようなヴェブレンのアプローチは、その著作が書かれた当時よりも地球規模の環境問題が焦眉の問題となっている現代において、より価値を持っているといえる。

しかし、ミッチェルの所説はヴェブレンの

基本的な方法論や上で触れた基本的な二分法についての言及がなく、ヴェブレンの経済学の基本的な視点と環境問題との関連がそれほど明確になっていないというらみがある。つまり、ヴェブレンにとって環境問題は制度分析の一つに過ぎない。また環境社会学という学問領域におけるヴェブレンへの関心の相対的な希薄さについての理論的な説明も掘下げ不足の感がある。とはいっても、現代における制度派経済学の有効性について吟味する際にミッチェルの所説は大きな価値を持っているといえよう。

注

- (1) エリック・ロールは、その著『経済学説史』の中でヴェブレンについて「今日彼の思想の力は広く承認され、その影響は広くみとめられているのであって、時としては思いがけない部分にさえ及んでいる」と述べている。Erich Roll, *A History of Economic Thought* second edition, revised and enlarged (London : Faber and Faber, 1945), p.448. エリック・ロール著、隅谷三喜男訳『経済学説史 下巻』有斐閣、昭和45年6月刊、248頁。
- (2) Max Lerner, *Portable Veblen* (New York : Viking Press, 1950), p.29. Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought : The American Contribution* (New York : Augustus M. Kelly-Publishers, 1967), p.31.
- (3) Gruchy, *op. cit.*, pp.21-28.
- (4) Ross Mitchell, “Thorstein Veblen Pioneer in Environmental Sociology” *Organization & Environment*, Vol.14 No.4, December 2001, pp. 389-408.
- (5) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class : An Economic Study of Institutions*, 1899
- (6) ヴェブレンとマルクスの関係については、例えば、小原敬士著『ヴェブレンの社会経済思想』岩波書店、昭和41年3月刊、111～125頁を参照さ

- りたい。
- (7) Ross Mitchell, *op. cit.*, p.390.リヤンは「社会学の研究者の大多数の者はヴェブレンを、その広範囲に及ぶ著作にもかかわらずほとんど知らない」と述べている。Barbara E. Ryan, "Thorstein Veblen: A New Perspective" *Mid-American Review of Sociology*, 1982, Vol. No.2, p.29.
- (8) Ross Mitchell, *ibid.*, p.390.
- (9) *Ibid.*, p.391.ここでミッチェルは、W.C.ミッチェル、J.R.コモンズ、J.K.ガルブレイス、K.W.カップ、P.バラン、P.スージーの名前を挙げている。
- (10) *The Theory of Business Enterprise* (Clifton: Augustus M.Kelley-Publishers,1975). *Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Times* (New York: Augustus M.Kelly, Bookseller, 1964).
- (11) Ross Mitchell, *op. cite.*, p.391.
- (12) *Ibid.*, pp.392-393.
- (13) 製作本能については、例えば、小原、上掲書、61～77頁を参照されたい。『有閑階級の理論』においてヴェブレンは製作本能を中心に論理を展開している。それは製作本能を諸本能の統一として看做している。しかし、その後『製作本能論』においては、本能を社会的な本能と個人的（反社会的）な本能との二つのカテゴリーに分類している。そこにおいて製作本能は補助的な位置におかれている。というのも、製作本能は無目的な本能だからである。また、ここでいう本能とは人間の主体性、能動性をあらわす言葉として用いられたおり、心理学的な本能とは異なるものである。この点については次の拙稿も併せて参照されたい。「ソースタイン・ヴェブレンの本能論－『製作本能論』第一章「緒論」の検討を中心として」日本大学経済学部経済科学研究所、紀要、第7号、185～205頁。
- (14) ジョセフ・ドーフマン著 八木甫訳『ヴェブレンとその時代』ホルト・サウンダース・ジャパン、1985年9月刊、250～280頁を参照されたい。
- (15) ヴェブレンの衣服論については拙稿「ヴェブレン衣服論」川口短大紀要、第21号2007年12月、1～22頁を参照されたい。
- (16) Thorstein Veblen, *Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Times*, p.317. footnote23.
- (17) *Ibid.*, p.119.
- (18) *Ibid.*, p.15.
- (19) *Ibid.*, p.168.
- (20) *Ibid.*, p.168.
- (20) *Ibid.*, p.187.
- (21) *Ibid.*, p.189.
- (22) *Ibid.*, p.193.
- (23) *Ibid.*, p.194.
- (24) Ross Mitchell, *op. cite.*, p.397.
- (25) Ross Mitchell, *op. cite.*, p.398.
- (26) *Ibid.*, p.398.
- (27) Veblen, *op. cit.*, p.124.
- (28) Ross Mitchell, *op. cite.*, pp.399-400.
- (29) *Ibid.*, p.400.
- (29) *Ibid.*, p.400-401.
- (30) *Ibid.*, p.401.ヴェブレンおよび制度派経済学に関するカップの論文に関しては、K.W.カップ著、柴田徳衛、斉藤興嗣訳『社会科学における総合と人間性』岩波書店、1981年10月刊の巻末にある「カップ著作目録」の制度派経済学の項(1～2頁)を参照されたい。
- (31) *Ibid.*, p.402.
- (32) Ross Mitchell, *op. cite.*, p.402.
- (33) *Ibid.*, p.403.
- (34) *Ibid.*, pp.403-404.
- (35) *Ibid.*, p.404.
- (36) *Ibid.*, p.404.
- (37) *Ibid.*, p.405.